都染直也先生のご退職によせて

日本語日本文学科教授　田　中　貴　子

都染直也先生は，令和４年３月末をもって甲南大学文学部の教授を退職されます。ご定年まで４年を残した勇退となります。先生は昭和56年３月に学習院大学文学部国文学科をご卒業になり，同年４月に東京外国語大学外国語学研究科日本語学専攻修士課程に入学され，昭和58年同修士課程を修了されました。同年４月，大阪大学大学院文学研究科日本学専攻社会言語学講座博士課程後期にご入学なさり，昭和60年３月に同課程を単位取得のうえ，満期退学されました。

甲南大学には平成２年４月に専任講師としてご着任になり，平成５年４月からは助教授，平成13年４月からは教授として勤められ，現在まで31年にわたって甲南大学で教育と研究に携わって来られました。平成22年には永年勤続による表彰を受けられています。

主な役職としては，平成14年４月より４年間，甲南大学学長補佐を務め，平成24年からの２年間は甲南大学教務部長，平成31年から２年間は甲南大学大学院人文科学研究科長を務め，文学部，文学研究科にとどまらず，甲南大学全体の運営に多大な貢献をされました。学長補佐時代には広い視野に立った大学改革に取り組まれ，人文科学研究科長時代には専修免許取得を希望する学生のためのコースを整備しスタートさせるなど，多様な価値観に基づく学びの展開を可能にされました。

先生は初年次学生の必修科目である「日本語学概論」を長年にわたって受け持たれたほか，本学科の特色の一つである「日本語学コース」の専門科目を多数担当され，学部のみならず大学院修士課程，博士後期課程の教育にも全力で取り組まれてきました。文学部以外の学部に開かれた基礎共通科目では，日本語学をさまざな角度から熱心に説かれました。とくに共編著として刊行された『甲南大学キャンパスことば』（1992年，私家版）に顕著に見られるように，「若者ことば」や「方言」といった学生の興味を惹起する話題は，学部の垣根を超えて多くの学生に日本語の面白さをアピールしたことでしょう。

講義以外にも，初年次教育である「基礎演習」をはじめ，「演習」「研究演習」「卒業研究」を通じてのゼミでは毎年多くの学生を迎え，規律正しく厳しい指導の中にもユーモアを交えたきめ細かな指導に定評がありました。毎夏に行われた方言調査は，学生どうしが協働して行う調査の基礎を学べるだけでなく，社会の一員として生きてゆくための作法をも身につけることができるよき機会でもありました。

先生のご研究はおおむね，「音声・アクセント」「地理言語学」「社会言語学」，そして「現代日本語」の四分野に分けることができます。地理言語学の分野では，「甲南大学方言研究会報告書」として兵庫県各地の言語地図を計31冊編まれており，社会言語学分野では，近畿地方を中心とするJR各沿線を移動しながら方言調査した成果として，20冊にのぼる「グロットグラム集」を刊行されています。音声・アクセントにかかわるご研究は科学研究費による報告書や教科書，教材として結実しており，現代日本語の諸相を垣間見ることができる編著書『日本のふるさとことば集成　第13巻大阪・兵庫』（2002年，国立国語研究所），『関西弁事典』（2018年，ひつじ書房）など数えきれません。神戸新聞連載をまとめられたご著書『ことばのとびら』は，軽妙な語り口の中に数多の発見がちりばめられた好著でもあります。兵庫県という地域に密着したご研究は，講演会やメディア出演などのかたちで一般の人々に親しまれています。その他，論文，研究ノート，翻刻等，先生のご研究は多岐にわたります。

播州と呼ばれる兵庫県西部に生まれ育った先生は，「話すだけで出身地が当てられる」と噂されるほどの方言研究の第一人者である一方，授業は標準語，学生との雑談は方言と使い分ける気さくな面もお持ちです。故郷を愛する気持ちは人一倍で，秋祭りの頃はしぜんと気分が高揚されるように見受けられました。日文科の共同研究室では気軽に学生に声をかけ丁寧に質問に答えられているお姿を，いったい何度お見かけしたことでしょう。

ご着任以来，教育研究はいうに及ばず学内行政にも詳しい先生は，学科の我々が頼りに思う「最長老」でありました。先生の多年にわたる甲南大学におけるご

貢献とご尽力に心より感謝申し上げ，今後のご健康と　　ご活躍を心よりお祈り申し上げます。